読解検定送信フォーム（←国語読解クラスの受講生で、読解検定を受けなかった人は、このフォームから送信してください。）

読解検定長文小６秋11月　講師コード：　　パスワード：　　） 送信

読解マラソン集 5番 恐らくまだ私が hu3

恐らくまだ私が小学校へあがらない、小さい時分のことだったろう。丁度薄ら寒い曇った冬の夕方だった。私は兄と父と三人で散歩に出たことを覚えている。父の方から私等を散歩に誘うことなどはなかったから、おおかたこの時も私等が「つれてって、つれてって」と無理に父の後へひっついて行ったものだろう。道はどういう道を通って行ったか、うろ覚えにさびれた淋しい裏町を通りながら、私等はいつの間にか、いろいろと見世物小屋の立ち並んだ神社の境内へ入っていた。薄気味悪いろくろっ首や、看板を見ただけでも怖気をふるう安達ケ原の鬼婆など、沢山並んだ小屋がけのうちに、当時としてはかなり珍しい軍艦の射的場があり、私の兄がその前に立ち止まってしきりと撃ちたい、撃ちたいとせがんでいた。恐らく私も同様、兄と一緒にそれを一生懸命父にねだっていたことだろう。父は私等に引っ張られて、むっつりと小屋の中へ入って来た。暗い小屋の内部の突当りに、電気で照らされた明るい舞台があり、ここかしこと遠く近く砲火を交える小さい軍艦を二三艘描いた青い油絵の大海原を背景に、伝記仕掛の軍艦が次から次へと静々と通過していた。ガランとした小屋の中には、客が二三人いるばかりで、そのうち当の射撃者はただ一人しかいなかった。撃った弾丸が命中すると、軍艦がぱっと赤い火焔を噴いて燃えあがりながら、それでも依然として何の衝撃も受けぬらしく、その軍艦は今まで通り静々と舞台の上を過ぎて行く。私はもちろんそれが本当に燃えるものとは思わなかったが、それでもどうしてあんなに本当らしく燃えるのだろうと、子供心に驚異の眼を見張りながら、一心不乱にこの光景を眺めていた。すると、

「おい？」突然父の鋭い声が頭の上に響いた。

「純一、撃つなら早く撃たないか」

私は思わず兄の顔へ眼を移した。兄はその声に怖気づいたのか急に後込みしながら、

01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33

「羞かしいからいやだあ」
と、父の背後にへばりつくように隠れてしまった。私は兄から父の顔へ眼を転じた。父の顔は幾分上気をおびて、妙にてらてらと赤かった。
「それじゃ伸六お前うて」
そういわれた時、私も咄嗟に気おくれがして、
「羞かしい……僕も……」
私は思わず兄と同様、父の二重外套の袖の下に隠れようとした。
「馬鹿っ」
その瞬間、私は突然恐ろしい父の怒号を耳にした。が、はっとした時には、私はすでに父の一撃を割れるように頭にくらって、湿った地面の上に打倒れていた。その私を、父は下駄ばきのままで踏む、蹴る、頭といわず足といわず、手に持ったステッキを滅茶苦茶に振り回して、私の全身へ打ちおろす。兄は驚愕のあまり、どうしたらよいのか解らないといったように、ただわくわくしながら、夢中になってこの有様を眺めていた。その場に居合せた他の人達も、皆呆っ気にとられて茫然とこの光景を見つけていた。私はありったけの声を振り絞って泣き喚きながら、どういう訳か、こうしたすべてを夢現のように意識していた。また自分自身地面の上を、大声あげてのたうちながら、衆人環視の中に曝されたこうした時分の惨めな姿を、私は子供ながらに羞かしく思わずにいられなかった。しかし父の怒りがやっとおさまりかけた頃には、私はもう羞かしいも何も忘れていた。ただじっと両手で顔を蔽うたまま、思い出したように声を慄わして泣きじゃくるばかりだった。そしてその合間合間に、はなや、涙を一緒くたにズルズル咽喉の奥へ吸いこみながら、私は先へ行ってしまった父の後からやっとの思いでトボトボついて行った。
（夏目伸六「父　夏目漱石」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

当時の私には、なぜこの時こんなひどいめにあったのか、その理由はまるで解らなかった。またそれを考える意識さえも持たなかった。しかし私と兄と二人の中で、なぜ自分だけが殊更あんなに打ったり蹴ったりされねばならなかったのか。その点について私は子供心にも淡い不満を感じていた。そしていつの間にか、私は父のこの行為を、一切理屈ぬきの持病の結果に帰してしまった。もちろんそれは一面においてたしかに病気の結果には違いなかったが、しかしその反面に横たわる他の原因、すなわち病的な父の心を刺激したその直接の動機に関しては、私は長い間全く無関心だった。ところがつい先頃、私は何の気なしに父の全集を拾い読みしながら、ふと次の数句に気を惹かれた。それには、

「……私の小さい子供などは非常に人の真似をする。一歳違ひの男の兄弟があるが、兄貴が何か呉れと云へば弟も何か呉れと云ふ。兄が小便がしたいと云へば弟も小便をしたいと云ふ。総て兄の云ふ通りをする。丁度其後から一歩々々ついて歩いて居る様である。恐るべく驚くべき彼は模倣者である。」

私はこれを読んだ時、ちらっともう二十数年も前に起こったあの出来事を、どういうものか咄嗟の間に思い起こした。そして父のあの時の恐ろしい激昂の原因が、何かこの数語の中に含まれているような心地がした。恐らく父は生来の激しいオリジナルな性癖から、絶えず世間一般のあまりに多い模倣者達を――、平然と自己を偽り、他人を偽る偽善者達を――心の底から軽蔑もし憎悪もしていたに違いない。

従って父は私の極端な模倣性を見るにつけ、その都度苦々しい不快の念を禁じ得なかったとも考えられる。またその苦々しい不快の念はいつか病的な父の心に鬱積して、兄と同様はずかしいからと射撃を拒み、その上なおも仕種まで同じように父の袖の下に隠れようとした私に向って、遂に猛然とその怒りを爆発させてしまったのではなかろうか。しかも父の真実性に対する渇ききった執着と、周囲を取巻く偽善者への忿懣は病気の進むにつれて必ず加速度的に異様な方向へ進展して行くのが常だった。正常における真実性への渇仰も病気に伴う極度の警戒心にゆがめられて、いつか、瞞されはしまいかという不安に満ちた疑惑に変り、その疑惑はたちまち、人は自分を瞞そうとしているのに違いないという奇怪な断定にまで到達する――たしかに父の病的な心理の推移は、一面こうした経路をたどって逐次悪化して行ったのに相違ない。しかも、兄に倣って、父の袖の下にかくれようとした私は、不幸にして「恐るべく驚くべき模倣者」であり、自分から撃ちたい撃ちたいとせがみながら、いざ撃てと云われれば嫌だという、許すべからざる偽善者であり、さらに意識的に父を欺いた憎むべき小忰だったのである。

（夏目伸六「父　夏目漱石」）

元気に孫の運動会を見にきて、その足で自分の妹や弟夫婦と二泊三日の旅に出て、そのまま帰ってこなかった。

父親とは九歳の時に早々死に別れたが、うかつなことに旅先の病院に駆けつけるまで母と別れるなんてことは考えてもいなかった。考える余裕がないほど母とは密着していた。

実は生まれて四十二年、母親と離れて住んだことがなかった。父が私という肩代わりを残してさっさと消えてしまったから、母ひとり子ひとり、りえとりえママの倍にあたる月日を常に一緒に生きてきた。

りえママのようなたくましさがなかった母は、夫を失った不安と心細さを娘である私にグチることで、そこから立ち直ろうとした。

「まったく神も仏もないね。ウチみたいに困っている家の瓦を台風に吹き飛ばさせるなんて。お前どうしたらいいと思う？」

最後は私に決断を求める。小学生の私は、あわてて飛んだ瓦を拾いに走り、それが使えないとわかると剥げた屋根にビニールを貼る方法を真剣に考えたものだ。

（中　略）

母のような大人になりたくないと思い始めたのは、まだ中学生の頃だったと思う。

私が自分のしたいことをすると世間体が悪いと怒るのに、私がアルバイトをするとすまないねと小さくなる母が何だか悲しくていやで、私が一番不機嫌になるのは「お母さんに似ているね」といわれた時だった。

母と違う生き方をしたくて、ずっと母と闘ってきたような気がする。それでいて、離れる勇気も放す勇気もお互いになかった。

母に似てると誰にも言われなくなったら、母に似ていると思える部分が自分の中にたくさんあることに気がついた。私がずっと苦戦していたのは、母の影ではなく実は自分自身の影だったのかもしれないなあと思う。

私の中の認めたくない部分を、母に映してそこを嫌悪し、勝手に屈折していたのかもしれないとも思う。母がいなくなって、いろいろなものが全部自分の中に映し出され、母への感情がシンプルな娘のものになった。

ずいぶん前に、子供は親の影と戦いながら親と逆の生き方をするか、抵抗しつつ同じ生き方をするかどちらかだというような説を読んだ覚えがある。親のいいところだけ取るという都合のいい道はないらしい。

自分に対してはいよいよ気が重いが、写真の母には素直になった。

写真は笑っている。旅先から家に連れて帰り、必死で笑っている写真を捜したのだ。これからも親の影を背負って生きていかなければならないだろう私を、せめて笑ってみていてほしかったからである。

（吉永みち子「母の写真」）

僕は一度だけ塾に通ったことがある。

小学校の六年生から中学の一年生の春までの間で、場所は北海道の帯広だった。塾の名前は正式の名称があったはずだが、今や覚えているのは狸塾という通称のほうだけだ。（別名ぽんぽこ塾と呼ばれていた）何故その塾に通いだしたのかは忘れてしまった。多分同級生がそこへ通っていたからだろう。あの頃、僕には三人の仲間がいた。

ありもり、おのだ、まなべ、の三人である。僕を含めて四人は学校が終わると毎日自転車をとばして塾へ通うのだった。雨の日も風の日も僕らは自転車でそこへ通っていた。競争するように競って、びゅんびゅん風を切って走っていたのである。

そうだ、今思い出した。僕がそこへ彼らと通うようになったのには、ちょっとした理由があったのだ。同じクラスのあやべさんという女の子がやはり通っていたからだ。僕は彼女のことがきっと好きだったのである。どうもまだ愛とか恋とかその手の感情に鈍感な時期だったので、あれがそういう感情のものだったかどうかちょっと自信がないのだが、授業中彼女のきりりとした横顔を見るのがすきだったことは確かだった。その横顔をもっと見たくて勉強の嫌いな僕は塾通いを決心したのである。あやべさんは帯広の大きな病院の令嬢で、ゴトウクミコにまさるともおとらない美形（いや、これは信じて頂くしかないのだが）な才女だったのだ。学校では当然人気者で、僕などそうやすやすと近づくことさえできなかったのである。だから、僕は彼女と同じ塾へ通うことにしたのだ。（中略）

僕らは塾帰りに、途中の国道沿いの雑貨屋で肉饅を買って食べる習慣があった。季節が変わり寒くなりはじめると湯気の昇る肉饅を食べることが凄く楽しみになるのだ。北海道の夜空は星が高く、きらきらと散りばめるように灯っていて吸い込まれそうだった。僕らは肉饅を口いっぱいにほおばりながら、その神秘的な輝きを見

つけていた。大きな星空を見ていると、自分たちの存在の小ささに気を失いそうになった。

僕らは微妙な年頃であった。恋を知り、物事をわきまえ始める年齢であったのだ。

「なあ、ニック。君は誰か好きな女の子はいるのかい」

ジョンは缶コーヒーを啜りながらそういった。

僕は思わず食べていた肉饅が喉に詰まりそうになって、一度咳払いをするのだった。

「なんだよジョン、いきなりそんなことききやがって」

（帯広はあまり方言らしい方言がなく、殆ど標準語であった。それから僕らの年齢の子供たちはテレビの影響もあって、東京風の言葉を使うのがかっこいいとされていたのである。僕は直ぐに土地の言葉や習慣になれる才能を持っていたのだ。それがないと転校生は余所の土地では生き残ってはいけないからだ）

「お、顔が赤いぞ。さては図星君だな」

ジョンがそういって僕の肩を叩くので、僕は思わず目を伏せてしまった。

「だれだよ、ニックは誰が好きなんだ」

ロバーツが煽る。

「ひゅー、ひゅー」

サムはポケットに手を突っ込んだままマフラーに首を竦めて僕を冷やかした。（中略）

僕は夜空を見上げた。星の瞬きがキャサリンのウインクのようで胸がときめいていた。沢山の初恋を経験していたが、多分あのときの感情が僕の本当の恋の第一歩ではなかったかと思うのだ。胸がときめくということを知ったのはまず間違いなく（断言はできないが）キャサリンが最初の女性であった。

（辻仁成「キャサリンの横顔」）